

短歌部門：総評

審査委員：歌人 黒瀬珂瀾

超然文学賞も第六回を迎えました。小説部門の選考委員も里見蘭先生に交代され、本コンテストも新たなステージに入ったと言えるでしょう。それを証するように、今回応募された数々の短歌作品は、前回までにも増して、現代社会が有する多様性を反映したものになりました。自己のセクシャリティについて掘り下げた作品がありました。また、自らの生活の場、土地性について再考する作品も複数見られました。

短歌には、〈当事者〉の文芸であるという一面も存在します。自分自身がどのような状況、現象、環境に立っているかを顧みる、または、自分が携えている特質や困難を見つめる、という役割もまた、短歌は有するのです。もちろん完全な空想世界への飛翔や、普遍的であることの肯定も短歌の機能です。それら様々な方向性を併せ持つことで、それぞれの短歌世界が広がってゆくのでしょう。

先般、重度身体障碍の当事者である市川沙央さんの小説『ハンチバック』が芥川賞に選出され、小説の世界では〈当事者性〉についての思索が広がっているように見受けられます。心身の障碍のみならず、民族やエスニシティ、言語、戦争や災害の被災、セクシャリティ、社会差別、生業や労働環境、趣味や嗜好、政治思想、貧困や格差などの経済環境、家族構成、身体性、その他諸々の〈当事者性〉が世界には認められます。それらを観察、内省し、記録・表現として書き残すことも文学の役割でしょう。などと言うと、それらの当事者性を何らかの特権と勘違いして反発する人も散見されます。それは違います。あえて言うなら、われわれは誰もが「われ」という事象の当事者であり、その当事者性を互いに書き合い、読み合うことで、他者への想像力や社会性を育ててゆく。特に、本コンテストに応募されるような高校生の皆さんにとっては、大切なことだと思います。

わたしの生は一回限り。過ぎさったあの夏はもう戻ってこない。今週は、そして今日は二度と繰り返されない。永遠に再会することのない一瞬一瞬を見送ることで、わたしたちは生きています。その一回性の当事者として生きることがそのまま、短歌という文芸には求められるのでしょう。人生経験の量や生きて来た時間の嵩は関係ありません。この瞬間にわたしが一体何の当事者であるのか、それを考え続けることから歌は産まれるのです。

そのためには、今この瞬間の眼前に具体的に何が存在するか、それをしっかり描写してゆることが肝要となるでしょう。歌が概念的や一般論的な感想、出来合いのイメージやフレーズのリミックスに陥らないようにするもの、それが当事者の一回性なのです。

今回の最優秀賞は波木琉香さんの作品「ややあって」に決定しました。

いちごジャム塗れば生まれる表裏私がこの朝食の神様
陽だまりもシンクの食器もひとりぶんや行え段のような土曜日

食パンには元来、表も裏も無いけれど、私がどちらかの面にジャムを塗った瞬間に、表と裏の概念が発生する。さりげない、時には無意識による選択によりこの世界に様々な決定を生み出すことで、わたしたちは一瞬一瞬を生きている。その選択の集積がこの世界なのでしょう。後者の歌、おそらくはひとりで過ごす土曜日の昼でしょうか。家族不在の土曜日を過ごすのはもう生活のならいになっている。それを「や行え段」と表現したのはユニークです。や行え段は実際にはあ行え段と変わらず、どちらも「え」です。変わったようで同じ「え」、しかし、「あ行」ではなく「や行」。変わってもなく、変わってなくもなく、微妙な時間が陽だまりに流れる。一週間が過ぎゆくことを鋭敏に察知する歌なのでしょう。

概して波木さんの作品には、穏やかな明るさがあり、日常から紡ぎ出した微細な抒情があります。繰り返される日々の中だけでしかつかめない一回性、と書くと矛盾したものの言いに見えるでしょうが、それを掴み出す力を波木さんの歌に感じ取りました。

知ってたか？君の書く「7」はまるいこと墮落は夏の季語であること
もし君を食べたら君のピアス穴のこるんだらうかドーナツみたく

「君」を巡って秀逸な歌です。前者、「まるい」というやや古風な言い方が、歌を優美に演出しています。下句は夏休みの間にだらけてしまうことを指すのかもしれませんが、こう書かれると何か真理を示す箴言のようです。上句の小状況と下句の大状況の対比に浮かび上がる「君」の姿が印象的です。後者はドーナツの穴言説という世俗的なクリシェをひっくり返して見せた歌です。どちらの歌も「7」の字や「ピアスの穴」という具体的に立ち止まった点に、かけがえのない抒情が宿るのです。

これらのセンスと感受性を信頼して、どうか波木さんには、広い世界へと旅立って欲しいと思います。

優秀賞一作目には水野結雅さんの「母だったひと・母になる人」が選ばれました。

前髪が目ですれすれに靡きあう纏わりついた陰口少し
爪噛めば鈍き音して階段に一本欠けるががんぼの脚

これらの歌のディティールへのこだわりは、一瞬一瞬の私の感情を逃すまいという試行です。眼前にゆれる前髪が微妙にうっとおしい。その靡きのように、私に対する誰かからの陰口が心で揺れている。三句目の「靡きあう」が、上句下句の両方に繋がっている点に注目してください。後者、爪を噛むことで自らの身体を意識する時、脚が一本欠損したががんぼに気付く。脚が一本欠けたががんぼがいる、ではなく、一本欠けている「脚」を結句に置いた点に注意してください。この歌でクローズアップされるのは「ががんぼ」ではなく、一本欠けた「脚」です。つまり、作者の前には、脚が一本失われていること自体が存在する。〈ない〉という現象がそこにあるのです。この認識の背景に、わたしが抱えるなにかの欠落がうかがえます。

島を棄てる船の飛沫の制服にまだあおいろがこびりついてら
朝食に残した出汁巻の渦よ母だった人・母になる人

前者、島という環境を見つめつつ、島を捨てゆく人と、制服を着て島に生きるわたし。その境界である海の飛沫が描かれています。「あおいろ」とは、島と作者をめぐる一種のアイデンティティと束縛の比喻なのでしょう。ここ、いま、を生きる者としての切実な詩情があります。後者、食卓に残された「出汁巻の渦」という具体性から立ち上がる「家族」への思いを読み取りました。下句に関しては選考会でも様々な読解案が提示されましたが、自分の母親や自分自身を顧みる感覚があるのではないのでしょうか。「他者」との関係の中に、自己の成長と身体性を見つめた一連であろうと思います。

もう一点の優秀賞には小島しずくさんの「漁火通信」が選ばれました。タイトル通り、海のイメージが散りばめられた作品です。

船首から海が綻び隣では君が珍しそうにさざめく
祖父製の精霊船が待機する奥座敷にて天気図を見る

前者、船が海を割って進んでいく景を表現しているのでしょうか。船が海面に水脈を立ててゆくさまを、海を綻ばせてゆくと捉えたのが秀逸です。それを「君」は珍しそうに見ている。一方、〈私〉にとってはこの海は日常なのでしょう。この対比が、日常を異化させてゆきます。このように小島さんの作品には、異化、異界を見つめる視線がある。後者、その土地ならではの風習の描写でしょう。船や海に密接して生きる土地性に取材して、そこにその土地ならではの精神性、いわゆる〈ゲニウス・ロキ〉を描いている。この時、普段慣れ親しんだ「奥座敷」が一瞬の異界となるのです。この「天気図」にも海が写っているような気がします。

自販機をふたつ飛ばして絵葉書に添える言葉を吟味している
漁火に充てられ過去のまっさらな素足を思い出す熱帯夜

前者の上句、歩いてきた距離の表現として斬新です。単純に言えば「ハガキに書く文面を考えつつ歩いていた」という日常が一瞬で独特でかけがえのない時間に変化する。そんな景の変容が小島さんの作品にはあります。後者、夜の遠くの沖にともる漁船の灯を眺めつつ、自分の過去を思い返す歌でしょう。その尺度が自分の身体である点がユニークです。こうした実直な感覚がこの作者の美点です。

以下、佳作入選作からご紹介します。

凍らせたポカリの味の偏りが私のすべてだったと思う
眠らない街に睡眠薬としてわたしを投与してから眠る

昆野永遠さんの「紙粘土を焼く」から。世界の疑問に立ち向かう姿勢のある一連で、抽象的な表現の繊細さに惹かれました。右前者、〈われ〉の把握としてユニークです。たしかに凍らせると甘いところと水っぽいところが片寄りますねスポーツドリンクは、このリアリティを一気に抽象的な感覚に結び付けた点がよかった。後者は、われと世界の対応関係の鮮やかさがあります。

だれか糸を吊っているようにきみの傘もきみの背骨も真っ直ぐおりる
若し死者に口のなければ生者にも耳なし 裸体美人のごと在りたし

鈴木伊都香さんの「羽化と緑」より。シニカルな世界観を思想的に提示してくる一連でした。やや表現が硬すぎるきらいもありますが、精神性の広さが魅力です。右前者、誰かがきみを操っている、そんなふうには私たちの街かどは広がっている。よく解る感覚です。後者、我々はみな口も耳もふさがれている、ということでしょうか。この世で私たちは無力だが、しかしこの身体ひとつは自在な美しさにありたい。切実な感情です。

「ちみもうりょう」の響きだけは好きだから資料集に折り目をつける
大盛りのラーメンを小皿に分けて父はゴルフの練習をする

吉田乙葉さんの「観覧車」。細やかに描かれた生活風景のポエジーが豊かで、家族の肖像として爽やかに読めました。前者、こうした微細な点を引き上げるところに作者の抒情がありま

す。後者、父親を突かず離れずの関係性のなかに描いて、新鮮な感覚があります。全体的におとなしめなところもありますが、ひとつの時代精神を〈生活〉を通して描いた点は巧みです。

今回も様々な意欲作と向き合うことができ、選考者冥利に尽きました。本賞を契機として生まれた入賞者同士の交流から学生同人誌「北辰」が刊行されたことは、この「場」のひとつの大きな成果です。この会誌が号を今後も重ねることを願いつつ、ここに加わるあらたな才能の誕生を、また来年も期待しています。